

(経済資料協議会の人々)

「関東部会名簿」(1966 年)を見ながら

菊 川 秀 男

(元東京経済大学・海事産業研究所)

1951 年に発足した経済資料協議会は、56 年に創刊した『経済学文献季報』の第 10 号を刊行したあたりからその赤字に苦しむようになる。この赤字問題を含む会の存亡をかけての対策を協議したのが、所謂「蒲郡会議」(1960 年)である。

『季報』の販売促進や会員機関の拡大などの方針を立てたこの会議を契機にして 1960 年代、会は「危機」を脱して「上昇気流」に乗る。『経済資料協議会五十年史』にいうところの「個人商店から株式会社へ」ということで、会の「黄金時代」へ向け走り始めた時期といえよう。まさに「古きよき時代」だった。

表題にいう名簿とは 1960 年代半ばの関東部会(後の東部会)のものである。謄写刷りのざら紙で僅か 7 ページのものだが、提出が遅れたとかでこれには記載されていない北大・小樽商大を含めて当時のメンバーは 11 機関であり(1950 年代末の時点で 4 だったが、その後アジア研、東経大、東大経済、小樽商大、北大など、協議会の屋台骨になるような有力メンバーが続々と加盟、60 年代の終わりには 14 機関になっている)、機関別に 69 名の個人名が記載されている。

協議会の創設に係わり、所謂「第 I 世代」といわれた方々のうち西部会の生島芳郎(神戸大)、前田昇三(京大)と川原和子(名古屋大)の 3 氏は残念なことに皆さん鬼籍に入られたが、東部会には会の創設期から 60 年近くにわたって会の「シンボル」として、会の歴史とともに歩んでこられた方が二人おられる。現在ともに名誉会員で、当時横浜国大におられた杉本俊朗先生と一橋大におられた細谷新治先生である。ご両人とも長い期間にわたり会長や理事長を歴任され、その重責を果たされてこられた。ともに大正生まれの満で 95 歳と 91 歳。

まずは杉本先生。このお歳で一人で電車に乗られて学会や研究会にも出られるし、今でも国内外の学術情報には目を光らせておられ、その知的関心は薄らぐことなく現役時代と少しも変わっておられない。

先生は本誌の最終号に、主に 20 世紀前半に多くの著名な学者・研究者を顧客に持っていたベルリンの古書肆店主シュトライザントの自伝の翻訳を掲載されるとか（翻訳の話は 20 年以上も前に細谷先生が薦めておられた）。古い経済学関係の図書や社会主義関係の資料など、社会科学関係文献の「宝庫」といわれたこの古書肆から、第一次大戦後の「円高」のお陰で日本の学者達がそれら学術書を大量に購入したといわれているが、この翻訳で日本における社会科学系の幾多の「文庫」の形成史の一端を新たに知ることが出来るような事柄が記載されていないか、期待したいところである。それにしてもこの自伝に出てくる、同店のさまざまなクライアントがどのような人物であったのかについて、一人ひとりに注を付けられるといわれておられる。対象物にはとことん迫り、蔑ろにしないという研究スタイルは現役時代とまったく同じで、お幾つになられても変わらない。

これは細谷先生もご一緒であったが、脇村義太郎先生の『回想録』や同先生の一連の著作物の編集作業などを通して、多くのことを教えていただいた。それらの著作に関連して私が分担した「注」の原稿を前にいろいろと注文を付けられ、「こんなことも知らないのか」と良く叱られたものである。何しろ抜群の記憶力の持ち主として学界でも有名だった脇村先生が舌を巻かれた杉本先生の博覧強記振りには、いつも驚嘆させられた。

江ノ島を目の前にしての片瀬のお宅では、かのシュトライザントも顔負けではないかと思われる膨大な量の書物に囲まれて、日々研究に余念が無いといったご様子、最近も、今から 60 年以上も前の敗戦直前に翻訳出版された本（F・H・キング『東亜四千年の農民』栗田書店 1944 年）の新版を出版する話があり、それについての思いを巡らしておられる。

細谷先生もそうだが、このお歳で杖も使われずに、歳が一回り半近く違う私などよりよほど早く歩かれる。

最近の電話での遣り取り。「この頃は一本（酒）が三日ぐらいしか持たない」「一本って、まさか一升ではないでしょうね」「いや、一升だよ、四合瓶はペロリと無くなる」「先生、それ飲みすぎですよ」。その十日ほど後、両先生に松本脩作さんと私がお会いした時の会話。「酒は一升が五日ほどだ」「先生、この間は三日と言われていたではないですか。嘘つかれてはダメですよ」「・・・（先生聞えないふり？）」「しばらくして言われたことは「最上川の舟下りをしたいな」、お元気なものである。

一方、細谷先生。最初にお目にかかってからもう50年近くにもなる。協議会のいろいろな活動の中で、あるいは社会人をメンバーとして組織された「細谷ゼミ」の研究会で、さらには上述の脇村著作集の編集過程で書物のことが中心ではあるが、それこそ様ざまなことを教えていただいた。その中には資料の世界から遠くはみ出しているが「海外一人旅のノウハウ」やその「各論」としての、「海外で強盗にあったときの対処法」に至るまで実地に指導してくださった。もっとも、不肖の弟子が物に出来たと思えるのは海外一人旅ぐらいであったが。

多くのお仕事をなされたが（著作物に関しては『私の体験的書誌学』に「著作目録」あり）、いまは「町のご隠居さん」という風情。夕食時と「夜半」には晩酌を欠かされないそうである（夜中に飲む酒は「晩酌」とは言わぬだろうが）。マイペースでゆったりと生活を愉しんでおられる。これが長生きされる秘訣なのであろう。こちらのご希望は、「山形の温泉に浸かりたい」とか、齢を重ねた弟子の方が音を上げそうである。

私の所属機関（東経大産業貿易研究所）が加盟したのが1963年だが、その頃部会で大活躍されていたのが法政大大原社研の永田（河合）利雄さん。是枝さんの前任者で協議会の組織拡大のレールを引かれた方である。「経済ドキュメンタリスト懇談会」なる看板を掲げて人を集め、東部地区の社会科学系の諸機関に片っ端から入会を勧誘されていたが、その実りを十分見られることなく、奥様の実家のある岐阜へ引き上げられた。後年、細谷ゼミで同地を訪れた時、河合さんは郡上八幡での名士になっておられた。

その後任が、後に会の事務局長として2期4年間にわたり汗を流

された是枝洋さん。一見寡黙な人だが、アルコールが入ると「破顔一笑」、困難な問題(そういえば難題が連続した時期だったが)にぶつかっても、「困りましたね」と口では言うものの 何時も難問を解決していた名事務局長だった。『五十年史』の編集委員でもあり、彼が執筆した「協議会の諸活動と組織の変遷」の冒頭の「『季報』の創刊から一時休刊まで」は、会の根幹を成す事業の歴史を回顧したものだが、協議会の「小史」ともいえる内容で、その纏め方は関係者に高く評価されたものである。

『五十年史』掲載の「会員機関等一覧」で冒頭に記載されているのが、協議会創設時の6機関のひとつである東大社研。そこには「東大の名物男」といわれた社研の大ボス中山一郎老が陣取っておられた。部会で秩父に一泊旅行をした時、三峰神社で鳥居の起源について開陳された「珍説」には一同爆笑をしたものである。この時のことを覚えておられる方は何人いるだろうか。

名簿の中で最大のスタッフを擁する機関といえば、同じ東大でも経済学部図書館。全員が協議会の活動に参加されたわけではないが、総勢22名(皆さん専任)。今時の大学等のライブラリーの現状からすれば「目を剥く」ような陣容であった。

他機関の人たちはこれを「斉藤軍団」と称した。「大将」は主任の斉藤滋さん。何時も温顔で親分肌の方だったが、入会するやたちまち会の中心人物になり、諸活動でリーダーシップをとられた。酒が入ると、高校生活をおくられた山形の「芋煮会」の話をよくされ、時には母校の旧制山形高校の寮歌を口ずさむことなどもあり、晩年まで旧制高校出身の雰囲気を持っておられるような方だった。

一方、穏やかな方でいつも笑顔を絶やされることのなかったのが、この図書館のご意見番でもあった太田重弘さん。長い時間をかけて編集された『明治文献目録－経済学とその周辺』は専門家に高く評価されたが(後に東大の「岸本英夫奨励賞」を受賞)、完成したのはこの頃だったろうか。割り箸の紙袋のコレクターで、私たちは旅をすると紙袋を土産にして太田さんの「点数」を稼いだものである。

このメンバーの中で、特に『季報』編集に係わったのは佐藤昭八、鈴木英夫、橋本健一、岩田勝さん達である。何れ劣らぬ「酒豪」ぞろ

い、仕事もよくされたが酒もよく飲まれた。

昭和8年生まれの佐藤昭八さん。この人も寡黙な人である。新潟県人で酒を愛する思いがことのほか深く、余りにも大事にしまっておくがために、「銘酒」を、「古酒」を通り越して「酢」にする「名人」。しかしただの飲兵衛ではない。ロシア語の達人にしてヴィオラ弾きでもあり、仕事の合間にはオーケストラのメンバーとしても活躍されたと聞く。

協議会にはなぜかロシア語を「操る人」が多かった。私の知っているだけでもこのほかに宮地さん、是枝さん、後藤實さん（東経大）、名簿にはないが喜入さん（亜細亜大）、東大ロシア語出身の程島さん（中央大・協議会の二代目「プリンス」）達がいた。

『季報』編集センターの実行部隊の中心人物は鈴木さん。その頃は編集作業が機械化される前の時代であるから、例えば著者名索引の原稿なども複写式の採録カードの一枚一枚をオーサーのABC順に配列してナンバリングするのだが、オーダーを間違えたりすると勿論一からやり直し。このような作業がパソコン上で簡単に出来る今の人たちには想像できないのではないか。彼が「飽きもせず」ガチャンガチャンとやっていた姿が今でも目に浮かぶ。一時「協議会のプリンス」といわれた人でもある。転出先の大学が何れも協議会と関係のないところだったため、「皇帝」にはならなかったが。

東大経済は加盟後（1964年）直ちに実力を発揮、67年度を皮切りに『季報』の編集センターを担当すること6回にも及ぶ（初めの頃は3年に一回、後には4年1回、この業績に対して、会の創立30周年記念総会の席上で、「経済学文献季報編集センターとして多大の貢献」をした旨の感謝状が、当時の木原正雄会長から授与されている）。

この間、私も「助っ人」を頼まれ自機関の勤務終了後、大学所在地の国分寺から本郷に再三駆けつけたものである。センター業務の多忙さを見ていられなかったという面もないわけではなかったが、何よりも作業終了後に出される、京都は伏見の銘酒「月の桂」にありつきたいがためでもあった。

仕事もしたが（大甘の自己採点）、よく遊んだ。特に斉藤さんがお元気な頃は、親睦と称して新年会に忘年会、花見や温泉めぐりなどよ

くやった。西部会の諸兄姉達からは「東は遊んでばかりいる」とかを「遊びの余暇に仕事をしている」などと何時も揶揄されたものである。

このような縁で斉藤さんには東大定年後、当時の私の所属機関（財・海事産業研究所）の脇村義太郎会長に乞われて、研究所の大型プロジェクトの『近代日本海事年表』の編集スタッフとなり、十年近く私と席を並べて作業をしていただいた。

その後のことになるが、岩田さんには私の退職時、私の職場（同研究所海事資料センター）の責任者をお願いし、さらにその後、上記の年表の『補遺版』の編集作業には、岩田・佐藤の両氏と和田隆子さんの東大経済の三人組と私とが係わることになり、「年表仲間」ということにもなった。

1964年度の総会開催機関だったアジア経済研究所の、「ライオンの原田」として「勇名」を馳せた原田義信さんの後任の参考課長が、後に『経済資料研究』の創刊（1969年）に私とともに係わった中村弘光さん。中村さんの頭の中に蓄積されているもろもろの情報は広くて深いものであり、分からぬことがあるとテーマの如何に拘わらず教えていただいたものである。ご自身をご存知ない場合でも、綿密に調べられて回答してくださるような方であった。

あるシンクタンクの創設業務の一端を非常勤で共に分担したことがあったが、アルコールの好きな方で、仕事が終わった後「一寸どうですか」と声をかけられなかった記憶がない。よく新橋あたりを一緒にふらついたものである。酒を愛し、絵画に通暁し、音楽にはことのほか造詣の深かった中村さん。会の研究企画の立案・出版の担当者として活躍された。

『資料研究』の創刊号は編集作業も順調だったが、2号3号の刊行の時期になると学園紛争が激化して、各機関で仕事をする場所がしょっちゅう「疎開」するようなことも多く、執筆者との連絡も原稿のやり取りも儘ならぬ時代だった。お元気であればその頃の思い出など本誌に書いていただけたと思うが、残念ながら亡くなられてもう3年になる。

その頃一橋大は、『季報』の和洋雑誌のほか和書の採録担当機関でもあった。『五十年史』に宮地幹夫さんが書かれているが、既存の書

誌に記載されている図書の書誌的事項のチェックや、同大学で未購入の図書を採録すべく、細谷先生を先頭に町の書店に繰り出し、書店の店員に「じゃま者」扱いをされながらカードを仕上げたとか。メンバーは松尾剛さん、倉又暁子さん、三枝辰男さんや山崎美奈子さん達であろうか。その内の一人が宮地さん。

宮地さんの話によると、「万引き」に間違えられたこともあったとか。ある程度の年配の、経済学など社会科学を専攻された研究者から、その研究活動が続ける過程で「どれほど『季報』に世話になったことだろう」とか「『季報』なくして今日の私はなかっただろう」などとよく感謝の言葉を耳にしたものである。パソコンなどというものがなかった時代の話ではあるが、感謝の言葉を口にする方たちも、時には「万引き」に間違えられる様な作業をしながら一枚一枚のカードを作成して『季報』が作られたということまではご存知無いであろう。『季報』は、大げさではなく「汗と涙」の結晶であったといえよう。

この「万引き屋さん」、謹厳実直が背広を着ているような人物で書誌学の造詣も深く、彼の「イギリスにおける書誌学論争」なる報告を聞く機会があったが、そこでコピンガンなる人物のことなどを教えられた。山を愛し、余暇にはチェロやコントラバスなども嗜むという趣味人。東大の佐藤さんとは音楽仲間でもある。

当時筆者の職場に古在重代さんがいた。面倒見のよい人で、私などは厄介なことは何時もこの人に押し付けていた。後のことではあるが、協議会の『五十年史』の編集の際は紅一点の編集委員として参加してもらい、とにかく話が広がりすぎて議論が纏まらぬ男たちに中であって、全体の進行を上手くコントロールしてもらったおかげで、ようやく完成にこぎ着ける事が出来た。この人の力に負うことが大きかった。

「幻のハンドブック」といわれた「日本経済資料ハンドブック」では、東経大の同僚の風間静夫さんと組んで担当した「財政」が提出原稿第一号だったのだが、私の怠慢で本の形にならず、今でも申し訳なかったと思っている。

名簿の方々の顔を思い浮かべながら記していたら、何か「飲兵衛列伝」みたいなことになってしまい、「困ったなー」などと思ったりしたが、一方オリンピックの水泳選手候補だった（ように記憶してい

るのだが）慶應大の菅野千枝子さんのような異色の方もおられた。協議会は正に多士済々であったといえよう。

この方たち以外にも多くの仕事仲間に恵まれた。その方たちとの交流も書き記して感謝の意を表したいのだが、この拙文のタイトルから外れてしまうので、残念ながら諦めた。「協議会百年史」でも刊行されるような機会でもあったら、後が続けたいものである。

いまもお元気な方のことも残念ながら故人になられた方のことも、そして昔のことも最近のことも思いつくままに、多くの思い出の一端として書き進めた。

さてこれからのことであるが、「協議会是不滅だ」などと肩張った物言いはしないけれど、曾て協議会に係わりのあった人々の交流の場として、最近杉本先生が良く口になさる「ビブロー会」なるものを立ち上げ、その旗の下に馳せ参じようかなどと考えている。泉下の川原和子さんに「まだ遊び足りないの！」と言われそうだが。